

## 基調講演

### 件名標目表の可能性 目録とウェブの主題アクセスツールとなりうるか

上田 修一（慶應義塾大学文学部教授）

件名標目表をテーマに取り上げるのは今や国立国会図書館しかできないことのように思われます。「主題探索」という話はどこでもやれることですが、テーマを「件名標目表」に限定した会議というのは、もはや持てないと思っていました。国立国会図書館が件名標目表を改訂するということは、停滞していた時期があっただけに大変喜ばしいことと思います。

日本では、60年代から70年代が公共図書館の時代、80年代が大学図書館の時代、90年代は電子図書館といわれていましたが、先ほど村上部長がおっしゃいましたように、2000年代は、国立国会図書館の攻勢の大変目立つ時代になってきているという感を強く持っております。お世辞でも何でもなく、大変結構なことだと思います。

#### 1. 件名目録の現状

##### 1.1 オンライン目録における件名

### オンライン目録における件名

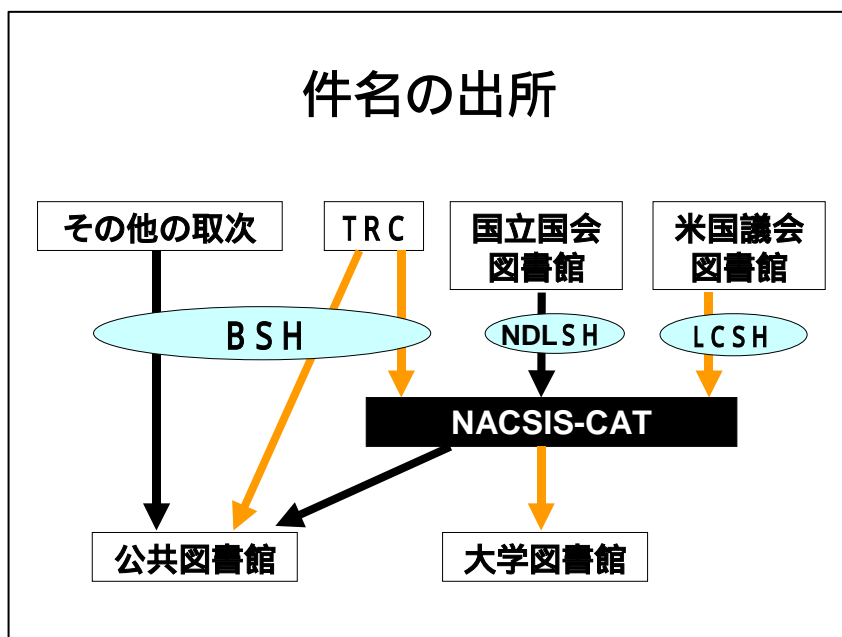
	館数	検索項目あり		件名表示	
大学図書館(神奈川県)	18	16	88.9%	14	77.8%
都道府県立図書館	25	23	92.0%	21	84.0%
市町村立図書館(富山県)	16	15	93.8%	15	93.8%
計	59	54	91.5%	50	84.7%

件名は標準的な検索項目となっている。

これはウェブで公開されているオンライン目録における「件名」について分析したものです。大学図書館、都道府県立図書館、それから市町村立図書館ですが、市町村立については数を合わせる都合で富山県をとりあげています。これはウェブのOPAC検索画面で件名が項目として独立しているかどうかを示したもので、9割以上が独立した項目となっていることがわかります。

それから、検索結果に「件名」の表示があるかどうかですが、これは若干少なくなりますが、それでも 84.7%あり、件名を標準的な検索項目として図書館が使っている、つまりオンライン目録で検索項目にしなければいけないと考えているということがわかります。

## 1.2 件名はどこから来るのか



この図は件名はどこから来るのかを示すものです。独自に目録をお作りになっている図書館もありますが、基本的に目録はどこからデータが来るということになります。国立情報学研究所の NACSIS-CAT を利用している大学図書館、それから公共図書館のごく一部には、国立国会図書館件名標目表 (NDLSH) と米国議会図書館件名標目表 (LCSH) と、それから図書館流通センター (TRC) のデータが行くということを表しています。またほとんどの公共図書館は直接 TRC や取次のデータが行くということになっていて、結局これらが出所になっています。

どのような件名標目表が使われているかですが、TRC や取次では基本件名標目表 (BSH) が使われています。それから国立国会図書館は NDLSH を使い、米国議会図書館 (LC) は LCSH、もちろん NACSIS-CAT の場合、必ずしも米国のものだけではありませんが、基本的にはこのようになっています。

## 1.3 件名の状況

これは 15 点の著作の件名を調べたものです (図 1 参照)。著作数が多く、ほとんど翻訳されていて、ある程度分野がはっきりしているという理由で、スティーブン・グールド (Stephen Jay Gould) の著作を 15 点選びました。これらについて国立国会図書館の NDL-OPAC でどういう件名があるかを見ました。 **「図 1. スティーブングールドの著作 15 点」**

それから NACSIS-CAT に関しては、翻訳書と原著にどのような件名がついているかを見ました。米国議会図書館については LC のウェブの目録で確認をしました。京都大学は大学図書館の一つの例で、NACSIS-CAT から来ているものになります。それから大阪市立図書館は大変活発な市立図書館で、ここにあるものを全部買っているわけで、実は都道府県立図書館でも全部買っているところはそれほどないので、かなり質の高い集書をしている図書館です。これらについて分析をいたしました。

## 件名の状況(1)

- 件名目録作業を行っているのは、国立国会図書館、TRC など取次、一部の大学図書館である。
- 大多数の公共図書館、大学図書館は自館では件名を付与していない。
- NACSIS-CAT 参加館では、総合目録ファイルの件名をそのまま取り込んでいる。

和書では BSH と NDLSH が混在している。

## 件名の状況(2)

- NACSIS-CAT の総合目録ファイルでは、洋書では、LCSH をコピーして用いるが、取り込まれない場合や一部削除される場合がある。
- 公共図書館では、取次などが作成した件名をそのまま利用している。
- 大学図書館でも公共図書館でも、件名のほとんどは BSH(+ ) である。
- 件名の付与されていないレコードはかなりある。

先ほど申し上げたように、件名目録作業を行っているのは国立国会図書館、TRC や取次と、それから一部の大学図書館、公共図書館になります。ですから、大多数の公共図書館、大学図書館は自館では、かなり以前から、自分たちでは件名を付与していません。それから、NACSIS-CAT と京都大学附属図書館を見ると NACSIS-CAT の参加館では総合目録ファイルの件名をそのまま取り込んでいるということがわかります。日本語の分だけですが、大体はこのようになっているということがわ

かります。

ただ、件名を落としているという例もあり、これが意図的なのかどうかはよくわかりません。NACSIS-CAT の場合は、NDLSH と BSH が混在して入ってきます。もちろん区別はついていますが、NACSIS-CAT の参加館では、自分のところのオンライン目録では何の区別もなく、両方を出しているというところは数多くあります。つまり、これは NDLSH の件名だ、あるいは BSH の件名だということが、利用される場で全然意識されない、2 系統のものが混在しているという状況があるということです。

NACSIS-CAT の総合目録ファイルでは、洋書では LCSH をコピー・カタログングしていますが、取り込まれない場合や一部削除される場合があるというのは、これは「米国議会図書館」と、「NACSIS-CAT の原著」の項を突き合わせて見ていただければわかります。最初の二つまでは同じですが、三つ目の『人間の測りまちがい』という本に関しては削られています。大多数は同じですが、削られているものがあるし、あるいは「なし」というのが下のほうに三つほどあります。つまり件名を取り込まずに作られているものがあるということになります。このように、元にあっても NACSIS-CAT でなくなって、さらに個々の図書館が落としてしまうこともありうるだろうということになります。

公共図書館では取次などが作成した件名をそのまま利用しています。大阪市立図書館の件名は、TRC のホームページ等、それから NACSIS-CAT の TRC ファイルで確かめましたが、全て TRC から来ています。そういうことになると、大学図書館でも公共図書館でも実は件名のほとんどは BSH プラスアルファ、つまり TRC が BSH だけではないという意味でプラスアルファがあります。したがって NDLSH のシェアというのはレコード単位の話ではありますが、13% ぐらい、10% から 15% の間であると言えます。

### 件名の状況(3)

- 国内では、1点に付与される件名数が少ない。  
洋書の場合は、平均2.6件のLC件名が付与されているが、和書(翻訳書)では、NDLSHは1.4件、TRCは1.2件である。
- LCSHでは細目つき件名が多い。  
付与されたLCSHの半数(19/38)は、細目つきの件名であるが、NDLSHは1割(2/20)、TRCは1件(1/19)である。

それから、件名の付与されていないレコードがかなりあると予想されます。もう一つ、もっと細かい話になりますが、洋書と比べて国内では1点に付与される件名数は少ないということが言えます。洋書の場合は平均2.6件のLC件名が与えられていますけれども、その翻訳書では、NDLSHが1.4件、TRCが1.2件と約半分です。

それからLCSHでは細目付きの件名が多いことがわかります。付与されたLCSHの半数、38件のうち19件は細目付きの件名ですが、NDLSHでは1割、TRCつまり、BSHでは1件であります。ですから、細目付きの件名はLCSHでは多用されているけれども、日本ではそれほどでもないということになります。

## 2. 件名標目表の概況

### 2.1 件名標目表の背景

	国立国会図書館件名標目表(NDLSH)	基本件名標目表(BSH)	米国議会図書館件名標目表(LCSH)
第1版	1964年	1956年	1909年
経緯	第2版(1973年), 第3版(1980年), 第4版(1986年), 第5版(1991年)	第2版(1971年), 第3版(1983年),	第2版(1919年),第3版(1928年),第4版(1943年),第5版(1948年),第6版(1955年),第7版(1966年),第8版(1975年),第9版(1980年),第10版(1986年),第11版(1988年)以後毎年改訂版を刊行
最新版	第5版(1991年)	第4版(1999年)	第26版(2003年)
標目数 (主標目数)	17,133件	7,847件	約25万件
標目の排列	訓令式ローマ字 アルファベット順	五十音順	アルファベット順
構造		階層構造	階層構造
ウェブ	ウェブでの参照可		ウェブでの参照可

これは、NDLSH、BSH、LCSHの比較です。国立国会図書館件名標目表が1964年にできて、現在第5版ですが、これについては、後ほどお話がありますが、今度改訂なさるといわけですね。これがウェブで公開され、NDL-OPACの検索補助として使うことができ、大変、便利になりました。印刷版は、訓令式ローマ字アルファベット順というわかりにくい排列になっています。これに関しては後ほど申し上げますけれども、なかなか興味深いことだと思います。

BSHは、5年前に第4版が出されました。ここでシソーラス構造というのを採用しています。

LCSHは、1998年にLCSHアニバーサリーという1世紀のお祝い事が行われ、レッドブックという、赤いLCSHの本をかたどったケーキが出て、みんなで食べたという記録があります。実際に第1版ができたのは1909年ですが、1898年というのはLC全体が辞書体目録に移行した年なんですね。そこを基点と意識しているということになります。LCSHは25万件あって、今はシソーラス構造になっ

ているし、それからウェブで参照，ブラウジングも可であり，毎年改訂版が出ているという状況であります。

## 件名標目表の背景

- 辞書体目録
- アルファベット順
- カード目録
- キーワードの伝統

件名標目表がなぜ出来てきたかということに関しては，その歴史が書かれた本を見ますと，その本の一番最初にあるのは，アルファベット順の排列の話となっています。つまり，言葉を並べて探していくのに，アルファベット順を使うというのは，今は当たり前のことですが，最初は革新だったわけです。次に，それによって辞書体目録を作ろうという発想が出てきました。つまり文字で表される，著者，書名，それにもう一つ件名を表すものを混在させた辞書体目録が，これからの目録であると認識された。そこで，件名標目表を作っていくという発想が生まれました。

また，カード目録が同じ頃に生まれるなど，いろいろな新しいことが19世紀末に起こってきて，その背景の中から件名標目表が生まれてきたということになります。

もう一つ，目録の教科書を書いているチャン<sup>1)</sup>によれば，件名目録の起源は米国に限らず，元々，書名目録でキーワードという一種のキーワード，書名では足りない言葉を補うものを付加してきたことにあっております。

### 2.2 日本の件名目録

このようにして件名標目表が出来上がってきたわけですが，日本では件名目録は，カード目録時代には，ほとんど作られてこなかったわけです。調査もありますが，極めて作成率が低いということになります。例外的に医学分野と音楽分野は，件名目録に熱心に取り組んでいます。医学図書館の場合は米国の影響でしょうが，カード目録でも件名目録がありました。音楽分野では現在でも音楽の件名標目表を作っています。

なぜカードの件名目録が作られなかったかについて，俗説ですが，日本語では書名目録が件名目録の代わりをするという説がありました。つまり日本語のタイトルでは例えば『経済学入門』『経済学概説』というように「経済学」という言葉が先に来るので件名と同じになるというわけです。でも，英語では「introduction」といったような語が書名の冒頭にくることが多く，「economics」が

最初に来ない。そこで、英語圏では件名目録が必要であったというもっともらしい話があります。これについて念のために確かめてみました。

**「経済学」「economics」を書名に持つ本の調査**

刊行年	和図書			洋図書		
	冊数	「経済学」で始まる書名	比率	冊数	「Economics」で始まる書名	比率
1903年	11	7	63.6%	8	0	0.0%
1928年	53	22	41.5%	43	5	11.6%
1953年	87	33	37.9%	38	8	21.1%
1978年	121	29	24.0%	127	23	18.1%
2003年	169	29	17.2%	144	20	13.9%
平均	441	120	27.2%	360	56	15.6%

これは国立国会図書館のオンライン目録，NDL-OPAC で調べた結果ですが、「経済学」と「economics」を書名に持つ本について，和図書と洋図書を検索いたしまして、「経済学」で始まる書名と「economics」で始まる書名がどれだけあるかを見ました。なかなか興味深いです。昔は確かに日本語の本で「経済学」という言葉を含んでいると，書名の最初に出てくる本が多かったんですね。25年おきに調べていますけれども，次第に減ってきています。一方，英語のほうは一定です。十数パーセントしかないということにして，昔は，今申し上げたようなことが言えなくなかったらしいですね。今はもうそんなことは，関係なくなったということになります。

### 3. 目録の変化と件名標目表

#### 3.1 目録の変化

さて，コンピュータ利用とネットワーク化は目録作成と利用に大きな変化をもたらしました。今さら申し上げるまでもありませんけれど，目録へのコンピュータ利用とネットワークが重なり合っ  
て，個別の図書館が行わなくても1個所で作った目録データをそのまま利用するという集中目録作業と，NACSIS-CATで行っている分担目録作業のいずれかで目録を作成するようになりました。

利用面ではカード目録からオンライン目録への移行があって，今やオンライン目録はこの図書館にもあります。また，館内利用からウェブへ，つまり自宅でも目録が使えるという時代にもなりました。目録の利用という面でも，コンピュータの及ぼした影響は大変大きいということになります。

また，目録対象の多様化というのも，件名に多少かわりがあると思います。つまり，本や雑誌以外の多様なメディアに対しても件名を付けるという問題もあります。

## 目録の変化

- コンピュータ利用とネットワーク  
集中目録作業と分担目録作業による目録作成  
カード目録からOPACへ  
館内利用からウェブへ
- 目録対象の多様化
- 目録対象の構造的把握  
FRBR  
書誌階層

もう一つ最近感じる変化は、今話題になっている目録対象の構造的把握です。新しい目録規則では、こうした考え方が反映されるのだらうと思います。『日本目録規則』は書誌階層という形で階層的な構造を理解させようという方向に移行しているわけですが、もう一つFRBR<sup>2)</sup>と呼ばれる、IFLAでやっております四つの階層による目録対象メディアのとらえ方があります。この中で、件名標目をどのレベルで与えるのかといえ、例えば、先ほど例で使った翻訳の場合があります。翻訳書では、原著も翻訳されたものも同じ件名であったほうが、一貫性があるだらうと思います。それを論理的に行っていくには、やはりFRBR的な考え方が必要だらうと思います。

### 3.2 オンライン目録のもたらした変化

## オンライン目録のもたらした変化

- 目録利用の増加
- 主題探索の増加
- 主題探索の失敗(ベイツ, 2003)
- 非力な件名標目表



オンライン目録がもたらした大きな変化として、オンライン目録になったことにより目録の利用が増加したことが挙げられます。今までほとんどの人はカード目録や冊子体目録を使っていませんでした。

主題探索の増加が見られるということが、いろいろな目録利用調査で言われています。主題探索と既知文献検索をどのように分けるかという点に課題はあるものの、一般的な傾向としては、主題探索が増加しているという報告があり、今までは主題探索は、全体の探索の20%か30%だったのが50%ぐらいになっていると言われています。ただし、主題探索の失敗、つまり利用者の主題探索がうまくいっていないというも、定説でして、これについてベイツがLCの依頼で報告書を提出しています<sup>3)</sup>。その中で今までのいろいろな調査結果をレビューして、要するに主題探索は失敗なんだと言っています。その背景としては件名標目表が非力だからということが、これも定説になっています。このレポートは国立国会図書館の橋詰さんが『現代の図書館』で紹介しています<sup>4)</sup>。

### 3.3 なぜ件名は機能しないのか

#### なぜ件名は機能しないのか(1)

##### ●利用者

「最少努力の法則」(マン)

面倒な手順は踏まない。

利用者教育やHELP機能の無力さ

サーチエンジンへの慣れ。

日本語しか使わない。

#### なぜ件名は機能しないのか(2)

##### ●索引と検索の仕組み

##### ●オンライン目録では、オンライン検索システムをそのまま導入している。

事後結合索引法(構文なし)

完全照合とブール演算子

なぜ件名が機能しないのかということですが、利用者側の要因が一つあります。トーマス・マンという米国議会図書館の方がお書きになった本<sup>5)</sup>の中で、「最少努力の法則」という経験則を述べています。要するに何かを探すときに、「研究者」は手元の資料しか使わないということです。つまり本来は網羅的に探さなければならないのに、そんなことはしない。手近の資料で見つければそれで満足してしまうということです。それを拡大すれば、利用者は面倒な手順は踏まないという話になってきます。図書館は利用者教育や HELP 機能の提供を熱心に行っているわけですが、面倒なことを厭う利用者は、ほとんど HELP を見たりはしないし、利用者教育を行おうとしても、参加者は少なく、実際の利用とはさほど結びつかないことになります。

また、サーチエンジンへの慣れという現状もあります。Google や Yahoo! の検索方法で検索を理解している。ですから、検索ページに向かえば、言葉を一つ入れれば何か結果が出てくるだろうと思っています。

それに検索の時には、日本語しか使わないというのも重要な事実です。日本の本に米国議会図書館件名標目表の件名を英語で付けても、それが使われる可能性はほとんどありません。

現在の環境下で件名標目が機能を発揮できないのは、索引と検索の仕組みに起因する問題があるためです。オンライン目録の検索システムは、それまであったオンラインデータベース検索システムを目録データに当てはめたものです。オンラインデータベース検索システムは、単語を「and」や「or」で組み合わせた完全照合方式を使っています。つまり、ある単語が、あるかないかを調べるという方法であり、件名の細目のような「構文のある単語群」は前提としていません。そうした環境の中で構文を持った件名標目表を扱おうとするわけですから、それは無理ということになります。

### 3.4 件名による探索の改善の試み

#### 件名による探索の改善の試み

- FAST(Faceted Application of Subject Terminology)
- ベイツの提案  
利用者語彙  
書誌ファミリー
- 三次元あるいは視覚に訴える語彙表示

件名による探索の改善の試みとして、FAST<sup>6)</sup>というのがありますが、これは、神門先生がお話しになるといいますので、ここでは説明を割愛させていただきます。

ベイツが提案している利用者語彙<sup>3)</sup>についてですが、利用者が検索したログの中から取ってきた

言葉を、うまく組み合わせて使えないだろうかという発想のようです。書誌ファミリーというのは、これは先ほどの翻訳の原書と翻訳書の関係や、ある人物が書いた著作と、その人物について書いた著作といったように関連する著作をグループ化して、ファミリーを作って、それを検索に役立てようというものです。これは大変面白いし、かなり書誌的な面の知識が必要なわけですから、図書館員にとっては適した仕事だと思います。共同分担作業で、著作間のリンク付けを行うのはできないことではないと思います。

また、情報検索分野で行われている語彙を三次元で表示したり、あるいは視覚に訴える形で表示する方法があります。言葉を入力するとその検索結果がグループ化されて、例えば、関連の深い文献は中央に球の形で表示されるといったことです。情報処理分野の方々は、画像化すれば、インターフェースが向上するという発想をお持ちのようで、様々なものが試みられ、これを導入したサーチエンジンもありましたが、全く使われなかったようです。

## 4. 件名標目表の論点

### 4.1 件名標目表はどこが作成維持すべきか

件名標目表には、まず、件名標目表はどこが作成維持すべきかという論点があります。日本では国立国会図書館と日本図書館協会とが作っています。米国の場合は、LCSHは議会図書館が作っています。一般に、図書館協会あるいは国の中央図書館が担当するわけですが、毎日実際の本を見て目録を作成して、件名を付与している機関が、件名標目表を作り維持するべきではないかと思います。つまり、そうした毎日の作業、本を見て目録をとることがないと、感覚が働かないだろうと思います。そうでなくて頭で考えた件名標目表というのは、literary warrant<sup>7)</sup>という面から言うところとあり得ないわけです。ただし、これも議論があるところだろうと思います。

### 4.2 学校図書館向けなどの簡易版は必要か

学校図書館向けなどの簡易版が必要なのかということが次の論点です。つまり大変詳しいものと、それから簡易版があって、学校図書館などでは簡易版を使えばいいじゃないかということです。件名標目表から知識を得るということもありうるのですから個人的には簡易版は不要と考えます。けれども、米国では学校図書館用のシアーズ・リスト<sup>8)</sup>が簡易版の役割を果たしているわけで、今でも3年おきぐらいに改訂されて存在しているのをみると、学校図書館向けの件名標目表も必要なのかもしれません。

### 4.3 国内でLCSHの翻訳版を用いるべきか

もう一つ、国内でLCSHの翻訳版を用いるべきかどうかという問題があります。つまり、もうNDLSHもBSHも捨てて、LCSHがグローバル・スタンダードなんだから、LCSHの日本語版を使えばよいではないかという極端な議論も、当然ありうるだろうと思います。そうではないと思います。LCSHの件名を見ていて、これは本当にグローバルなのか、やはり米国でしか通用しない件名が多いのではないかと思います。世界各国でも翻訳版をそのまま全部用いているところなどはなくて、LCSHを使っ

ている国でもアレンジメントしています。そうなると翻訳版を作るメリットや使う利点は薄れてしまいます。全くなければ仕方ないでしょうが、すでにあるのだから、これらを良くしていくのが本筋でしょう。

#### 4.4 階層構造は必要か

細目は必要か、階層構造は必要かについてですが、細目に関して、どちらかといえば不要という見解です。階層構造に関してもネガティブです。なぜなら検索のときに、複雑な構造を持たせるほど、その利用が難しくなるからです。先ほどの「最少努力の法則」にもありましたが、利用者は面倒なことをしない傾向があります。今のウェブのサーチエンジンに慣れてしまった利用者に、統制語彙を学べということだけでも負担をかけるのに、さらに細目の規則などを強いるのは無理です。ですから単純な階層構造にしてしまったほうがよいのではないかと思います。多分、そうした乱暴な話はなかり、細目を取り去ったら件名標目表ではなくなってしまうというご意見もあると思いますが、件名標目表を生きながらえさせるにはそうせざるを得ないと思います。

#### 4.5 ウェブに応用できるか

件名標目をウェブに応用できるかという課題があります。OCLCではLCSHをウェブのメタデータのデータベースに利用しているわけですし、国立情報学研究所でも同じようなことをしています。しかしながら、LCSHの複雑な細目規則と階層構造を維持したままで、だれかに付与させ、しかも検索させるというようなことは、いささか難しいのではないかと、ウェブで使うためには簡素化せざるを得ないと思います。

#### 4.6 フィクションにも件名を付与すべきか

### ジェフリー・アーチャー『運命の息子』

Sons of fortune / Jeffrey Archer.

- Twins--Fiction.
- Brothers--Fiction.
- Infants switched at birth--Fiction.
- Vietnamese Conflict, 1961-1975--Veterans--Fiction.
- Banks and banking--Fiction.
- Politicians--Fiction.
- Hartford (Conn.)--Fiction.

Genre/Form

- Domestic fiction.
- Psychological fiction.

最後に、フィクションにも件名を付与すべきかという問題があります。これはジェフリー・アーチャー (Jeffrey Archer) というベストセラー作家の『運命の息子』という本に対して、LC が付与した件名です (p.16参照)。決して全てのフィクションに対して件名標目が付けられるわけではないのですが、見ていただくとわかりますが、中身を全部読まないで付与できないような件名が付いています。お読みになった方はなぜこういう件名が付いているか、おわかりになるわけです。そこまでして件名を付けなくてはいけないのかというご意見もあるかと思いますが、私は小説に分類や件名を与えるということを行ってよいと思っております。小説などの主題探索はこれまでも試みられてきましたが、是非、実現させたい課題です。

#### 4.7 各国の件名標目表の状況

これは各国の件名標目表の状況を調査した表です。国名のアルファベット順でドイツまでの例ですが、ここで件名標目を付けてないのは、デンマークとフィンランドという二つの国だけです。そのほかは何らかの形で件名標目を持っている。つまり、国立図書館、中央図書館で件名標目表を持って、件名標目を与えているのが、標準的な姿であるということになります。独自の件名標目表を持っている国と、ブラジル、チェコ、それからフランスに関しては、LCSH の翻訳も併用、つまり LCSH を翻訳して、自国に拡張した形で使っているようです。やはり、このように国立国会図書館が件名標目表を維持していくということが中央図書館としての役割に成ることになると思います。

### 各国の件名標目表の状況

中央図書館の目録で用いられている件名標目

国	言語	件名標目
アルゼンチン	スペイン語	キーワード
オーストラリア	英語	LCSH(英語)
オーストリア	ドイツ語	独自の件名標目表
ベルギー	フランス語, オランダ語, ドイツ語	LCSH(英語)
ブラジル	ポルトガル語	独自の件名標目表
カナダ	英語, フランス語	LCSH(英語)
チェコ	チェコ語	独自の件名標目表
デンマーク	デンマーク語	なし
エストニア	エストニア語, ロシア語	独自の件名標目表
フィンランド	フィンランド語, スウェーデン語	なし
フランス	フランス語	独自の件名標目表
ドイツ	ドイツ語	独自の件名標目表

## 5. 今後

### 5.1 国立国会図書館件名標目表の課題

では、国立国会図書館の件名標目表の課題としてどういうものがあるのかを考えますと、まずは、語彙を増加しなければいけないと思います。10万語というのは、これは NDC の分類などでは、選書

に役に立つのは上から 5 桁目ぐらいの分類記号です。上から 3 桁ぐらいだと多すぎてどうしようもないということになって、5 桁目ぐらいでの特定性，具体性があると考えます。ですから 10 万語を目指してほしいと思います。

それから，当然ですが新語の迅速な追加を行ってほしいと思います。今回のように十何年もたって改訂するのではなくて，毎年改訂をしたっていいじゃないか，もう冊子体である必要はなくなったのだから，いくらでも新しい言葉を追加していいのではないかと思います。

## 国立国会図書館件名標目表の課題

- 語彙の増加  
10万語
- 新語の迅速な追加
- 類義語のコントロール
- 件名データの配布システム

類義語のコントロールは，これはシソーラスの大きな機能であり，欠かすことはできません。しかし，階層構造について労力を割くのは前述のようにやや疑問があります。

それより，件名データの配布システムを考える必要があります。つまり，NDLSH がなぜシェアが小さいかといえば，配布システムがうまくないからです。これは構造的な問題であり，国立国会図書館ではどうしても出版から書誌データの作成まで一定期間を要します。現在は，書誌データの作成から提供まで平均 5 週間を目標とされているということで，以前の 3 か月より改善されたわけですが，それでは，図書館では使われないうちだと思います。私が考えるのは，国立国会図書館は TRC や日販と一緒に件名標目表を作り，TRC や日販を通じて配布したらどうかというやや乱暴な案を持っています。そうでもしないと，一所懸命作ったところで，あまり使われないうちになってしまいます。

### 5.2 件名標目表の使命

件名標目表は図書館の主題に対する関心と取り組みを明示する機能を持っています。分類表も同様ですが，件名標目表のほうが主題に対する意欲を鮮明に表すことができます。ですから件名標目表というのは，図書館にとってはかなり大きな存在で，この機能を無くすと図書館というものの存在意義に影響を及ぼします。

最後に，利用の実際における件名標目の効用について申し上げますと，それは検索語の拡張で有

用であると言えます。今、一部の大学図書館や公立図書館の OPAC では件名標目にリンクがなされています。そのため、検索結果があれば、それに関連するものをリンクをたどって探すことができるわけです。つまり、件名標目をクリックすることによって、主題探索の拡張ができるということです。これが件名標目表利用の現代的な姿であり、充分役立っていると思います。

## 件名標目表の使命

- 図書館の主題に対する関心と取り組みを明示する機能。
- 最新の状況にも対応しているという姿勢。  
「911 Terrorist Attacks, 2001」という LCSH 実務面での効用。  
OPAC の検索結果から拡張する際のリンクとしての使用。

## 注

---

- 1) Chan, Lois Mai. ケンタッキー大学図書館情報科学学校教授。FAST プロジェクト（注 6 参照）のメンバーでもある。邦訳された著作に次のものがある。  
L.M. チャン著，上田修一ほか訳．目録と分類．勁草書房，1987，418p. < 国立国会図書館請求記号 UL611-32 >（原書名 Cataloging and classification ）
- 2) Functional Requirements for Bibliographic Records の略。書誌レコードの機能要件。IFLA の研究グループが提示した目録の概念モデル。目録の目的・機能を利用者の視点から再構成し、求める資料を、タイトルや著作者だけでなく媒体などからも簡単に選ぶことができることを目指す。  
< <http://www.ifla.org/VII/s13/frbr/frbr.htm> >（last access 2005-04-20）  
IFLA 研究グループの最終報告書日本語訳（和中幹雄，古川肇，永田治樹訳．書誌レコードの機能要件．日本図書館協会，2004，121p. < 国立国会図書館請求記号 UL631-H9 >）参照。
- 3) ベイツの提言。LC からの委託を受け、カリフォルニア大学の Marcia J. Bates が報告したレポート「図書館目録とポータル情報における利用者アクセスの向上」（最終報告は 2003 年 6 月）。主題検索の困難解消に、利用者語彙の構築や関連する書誌レコードのグループ化等を提言。

<<http://www.loc.gov/catdir/bibcontrol/2.3BatesReport6-03.doc.pdf>> ( last access 2005-04-20 )

4 ) 橋詰秋子 . 米国にみる「新しい図書館目録」とその可能性 - ベイツレポートを中心に . 現代の図書館 . vol.41,no.4, 2003.12, p.222-230. <国立国会図書館請求記号 Z21-8>

5 ) Mann, Thomas. "[ch.] 8 The Principle of Least Effort . Library research models : a guide to classification, cataloging, and computers. Oxford University Press, 1993, p.91-101. <国立国会図書館請求記号 UL735-A3>

6 ) Faceted Application of Subject Terminology の略。ウェブ上の資源を，件名から検索できるようにするために開発された索引語の体系。OCLC のプロジェクトであり，LCSH をベースに開発されている。

<<http://www.oclc.org/research/projects/fast/default.htm>> ( last access 2005-04-20 )

7 ) 文献的根拠。ここでは，ある件名に対して，それに該当する資料が必ず存在すること。

8 ) 米国の学校図書館，小規模な公共図書館で広く利用されている件名標目表。1923 年に

List of Subject Headings for Small Libraries 第 1 版が刊行され，第 6 版からタイトルを Sears List of Subject Headings と変更。最新版は第 18 版。

Sears List of Subject Headings 18th ed. H.W.Wilson, 2004, 804p.



図1. スティーブン・グールドの著作15点

書名	出版年	国立国会図書館	NACS/CAT		外国国会図書館	京都大学 附属図書館	大阪府立図書館
			題名書	著書			
ダーウンの収束	1984	進化・進化論	NDSLH:進化;NDSLH:進化論	Evolution -- History ; Natural selection -- History	Evolution (Biology)--History; Natural selection--History	NDSLH:進化;NDSLH:進化論	進化論
超体美法と神祕美法	1988	遺伝学;系統学(生物学)	ESH:遺伝学;ESH:進化論;NDSLH:遺伝学;NDSLH:系統学(生物学)	Phylogeny ; Cladogeny	Phylogeny ; Cladogeny	ESH:遺伝学;ESH:進化論;NDSLH:遺伝学;NDSLH:系統学(生物学)	遺伝学;進化論
人間の測りまじい	1988	知能検査;適性計測;能力テスト	ESH:適性計測;ESH:社会心理学;NDSLH:知能検査;NDSLH:能力テスト	Man, Intelligence, Measurement, IQ 1988 ; Intelligence tests -- History	Intelligence tests--History; Ability--Tests--History; Personality tests--History ; Craniometry--History	ESH:適性計測;ESH:社会心理学;NDSLH:知能検査;NDSLH:能力テスト	適性計測;知能検査;社会心理学
アフリカの猿	1988	進化論	ESH:進化	Sexual history -- Aka, wags, lewos	Sexual history	ESH:進化	進化論
時間の矢-時間の環	1990	地史学 -- 歴史;地質学 -- 歴史	ESH:地質学 -- 歴史;NDSLH:地史学 -- 歴史	Geological time -- Study and teaching -- History ; Bursell, Thomas, 1639?-1715. Toldrich-Herle's work ; Hutton, James, 1726-1797. Theory of the earth ; Lyell, Charles, Sir, 1797-1871	Geological time -- Study and teaching -- History ; Bursell, Thomas, 1639?-1715. Toldrich-Herle's work ; Hutton, James, 1726-1797. Theory of the earth ; Lyell, Charles, Sir, 1797-1871	ESH:地質学 -- 歴史;NDSLH:地史学 -- 歴史	地質学-歴史
論のあかし(リビウズ)	1991	訳書	NDSLH:訳書;ESH:科学	Biology ; Biology -- Book reviews	Biology ; Biology -- Book reviews	なし	科学
ワンダフル・ライブ	1993	進化	ESH:化石;ESH:動物	Invertebrates, Fossil -- British Columbia -- Yoho National Park ; Paleontology -- Canada ; Paleontology -- British Columbia -- Yoho National Park ; Burgess Shale (B.C.) ; Paleontology -- Philosophy ; Contingency (Philosophy) ; Yoho National Park (B.C.)	Invertebrates, Fossil--British Columbia--Yoho National Park ; Paleontology--Canada ; Paleontology--British Columbia--Yoho National Park;Paleontology--Philosophy ; Contingency (Philosophy); Burgess Shale (B.C.); Yoho National Park (B.C.)	ESH:化石;ESH:動物	化石;動物
がんばれかたが電	1995	進化	ESH:進化論	Natural history -- Popular works ; Evolution -- Popular works	Natural history--Popular works;Evolution (Biology)--Popular works	ESH:進化論	進化論
川辺の子爵	1996	進化	ESH:進化論	なし	Natural history--Philosophy--Popular works;Evolution (Biology)--Popular works	ESH:進化論	進化論
アモラの戦艦	1996	進化論	NDSLH:進化論	なし	Evolution (Biology)--History; Natural selection--History	NDSLH:進化論	進化論
ニワトリの産	1997	進化論	ESH:進化論;NDSLH:進化論	Organsm, Evolution, Theories ; Evolution	Evolution (Biology)	ESH:進化論;NDSLH:進化論	進化論
星と動物の星	1998	種;動物年代学	ESH:種	Two thousand, A.D ; Calendar -- Social aspects	Two thousand, A.D ; Calendar -- Social aspects	ESH:種	種
フルノウス	1998	進化	ESH:進化論	なし	Evolution (Biology); Natural history ; Evolution ; Nature	ESH:進化論	進化論
平らななかの想像	2000	進化	ESH:進化論	Evolution (Biology) ; Natural history	Evolution (Biology) ; Natural history	ESH:進化論	進化論
ダ・ヴィンチの二枚目	2002	進化	ESH:進化論	Natural history ; Evolution (Biology)	Natural history ; Evolution (Biology)	ESH:進化論	進化論